

「昭和中期の文化財調査記録」展

戦後富山県では、文化財調査委員を配置し保護・指定を目的とした数々の調査を行ないました。

本展では、昭和中期県内のさまざまな文化財調査に携わった二人の専門家のスケッチブックを展示し、当時の記録のありようを紹介します。

またあわせて、重要文化財「銅造帝釈天立像」の刻銘解説にも関わったこの二人の書簡類等も公開し、当時の立山信仰に関する研究のようすも紹介します。

1 1950～60年代の文化財記録

戦後、富山県では史跡名勝天然記念物調査会を置き、文化財指定を前提とした調査研究が行われました。また美術工芸分野については文化財調査委員が置かれ、富山県史編纂にも従事していくなどの体制が組み立てられました。

このころは、まだ小型カメラが普及しておらず、文化財などの調査記録は、ノートやスケッチブックなどの紙媒体に記録することが主流でした。実際の作品を見て、時代・作者・材質・技法などの基本的な情報を記録し、図様を写し、作品の特徴を文字と絵を交えて書き留めました。観察・調査にもとづき、時代や作者など不明な点について検討し評価に至る、ということを連綿と重ねてきたのです。

これらの記録は、副次的資料であるため、廃棄や散逸することが通常でした。しかしそこには、現在見るできないもの、散逸したもの、消滅したものなどの記録が残されていることもあり、記録そのものを保存・伝承することが、今日的課題とされています。

2 ^{ながしまかつまさ}長島勝正氏の記録と業績

富山県文化財調査委員の一人長島勝正氏（1904～1990）は、東京美術学校（彫刻科）出身で、国分寺研究者として名高い堀井三友氏の助手として越中国分寺や越中瀬戸窯の発掘調査などに携わりました。のち仏像などの古美術の調査研究を進めました。

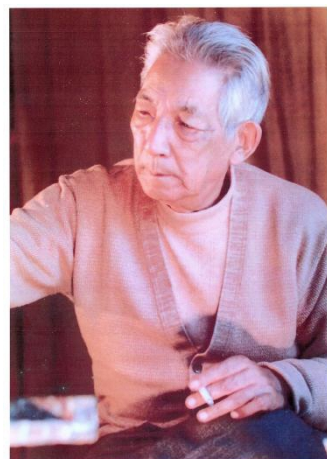
考古学は古墳時代以前の研究が主流で、それ以後は美術史分野の研究者が調査・研究をしていた時代でした。長島氏はそのような時代のなかで活躍した研究者でした。

長島氏の最大の功績は、明治時代立山から県外に流出した仏像に注目し、海外流出を目前に食い止め、富山県知事に買い戻させたというエピソードが知られます。



矢疵阿弥陀如来スケッチ

1956年 長島勝正氏による



長島勝正氏

その仏像は、国重要文化財に指定された「銅造帝釈天立像」（富山県〔立山博物館〕蔵）です。

当時富山県では、「立山禪定」の刻銘にもとづき「立山神像」として指定を受けました。しかし杉崎貴英帝塚山大学教授と富山県〔立山博物館〕の共同研究により、帝釈天像であることがわかり、2015年に指定名称を変更し、現在に至ります。

長島氏の残したスケッチブック8冊は、1955年頃から1963年頃までの調査記録が刻銘に記されています。美大出身ということもあり、図像の描写はすばらしいものです。

3 いしはらよさく 石原与作氏の記録と業績

教員・中学校長を勤めた郷土史家 石原与作氏（1906～1985）は、立山町上末の城前家に生れ、教員のかたわら中新川郡に関する調査研究を主に行ない、のち各地の郷土史編纂にも力を発揮しました。1960年には、長島勝正氏とともに、富山県の立山信仰遺跡調査にも参加しました。

石原氏も長島氏同様、スケッチブック一冊に調査記録を残しました。その記録内容やスケッチは正確なものでしたが、立山町や富山県が発行した報告書には残念ながら反映されませんでした。

1957年2月、石原氏は「立山御神像銘の考察」と題する原稿を書きました。

その内容は、立山町米道付近にあった大田寺（太田寺 大伝寺とも）が鑄造を依頼したという刻銘の解説について書いたもので、名称変更まではそれが通説となっていました。石原氏の原稿は、それを最も早く指摘したものとして重要です。

（＊現在は土田寺（つちたじ・ちったじ）と読まれ、富山市奥田にあった寺とされています）

この原稿は、長島氏に送られましたが、その後公表されることはありませんでした。



石原与作氏

立山御神像銘の考察

石原 与作

◇越中新川郡太田寺奉鑄のこと

愛知県春日井市に存する重要美術品「立山御神像」の銘に「寛喜二年（一二三〇）庚寅二月十一日 南瞻大日本國越中新川郡太田寺奉鑄書之・」とあって、鑄造されたる太田寺の所在につき現在の所次の如き見解をもつものである。

之は恐らく中世以降立山讃仰のため繁栄してゐたる中新川郡立山町上末（当時は須江庄上すへ村）に存した大田寺（又は大伝寺）によって鑄造されたものと思われる。

当時全国各地に須恵器を製するために陶工が分散してゐたが、特に越中に於ても須江庄は奈良朝時代より庄名の存する如く当時の唯一の工業地帯であり、立山拝礼のための拠点としてもそれ以後の岩嶺・芦嶺に勝る繁栄を示していたらしく、今に上末千坊の伝説と共に、当時の寺跡を数多く留めている。

殊に上末村東方の山麓には最も多く、今も地名として、法光寺谷・大坊谷・大門・念仏田等あり、之に続いて末谷口村の蛇谷方面には鐘撞堂の跡という礎石等をも存している。同村鎮守境内からは十数年前、正安二年（一二三〇）在銘の仏具をも出土した。

大田寺は此の上末と米道村（旧釜ヶ淵村）との境界にある段丘崖端に長く南北約七〇〇m、東西約二〇〇m余の地域の地名であつて、土地台帳には「大田寺」とも「大伝寺」とも両様に記されていて、恰も立地的には平地に対する状態よりみると、上滝の大川寺、眼目の立山寺の如き位置を示している。然もその南に「地藏堂」、北に「釈迦堂」の地名ありて、中世の壮大な伽藍配置を偲ばれ、「寺田」約二町位の地がある。

想うに当初太田寺とも大田寺とも記されたが、後世殆んど大伝寺をのみ記されたものでないか。

◇大伝寺（大田寺）に関する伝承

文化三年（一八〇六）立山芦嶺寺の由来書帳には次の通り記してある。

一、立山七千八社の大道場依之先年は立山の末社文殊寺・森尻寺・日中寺・大伝寺・千坊ヶ原・岩嶺寺・芦嶺寺、以上七ヶ所の衆徒社人毎年六月十二日芦嶺大宮講堂に集り大祈禱仕り同十四日十五日両日良辰を撰び大祭礼等勤修し来り奉り候処、就中右七ヶ所の内、五ヶ所は退転に及び申故、中古以来は芦嶺岩嶺両寺衆徒社人右大宮講堂にて、御作法毎年怠慢なく勤行等仕来候御事

（以下略）